

新刊紹介 豊島修著 『熊野信仰の世界——その歴史と文化——』

中 前 正 志

熊野は人跡絶えた奥まった辺境、土地の意といわれるが、紀伊熊野には古代に神の死と墓に関する神話があり、『古事記』『日本書紀』、死者の霊の往く「黄泉国」との関係が顕著である。そこはこの世とは次元の異なる世界であり、宗教的聖地として神聖視された「熊野三山」（本宮・新宮・那智）が鎮座されたのも、「死の国熊野」と無関係ではなく、その世界への執念が平安後期から中世の人びとの心をとらえていた。「日本第一大靈験所」として、「人まねのくまのまうて」（『玉葉』文治四年（一一八八）九月十五日条）と呼ばれたほどに、諸国から多くの熊野詣での道者が集まった所以である。

（豊島修「人まねのくまのもうで」久保田淳編『日本古典文学紀行』（岩波書店、平10）収録）

民俗学関係書を中心に手掛ける慶友社が、「民衆宗教を探る」というシリーズ名を冠して、『阿弥陀信仰』（蒲池勢至著）『お地蔵さんの世界—救いの説話・歴史・民俗—』（渡浩一著）『路傍の庚申塔—生活のなかの信仰—』（芹田正次郎著）

といった書籍を数年前から出版していたが、このほど同シリーズの一冊として、「日本第一大靈驗所」たる熊野の信仰を取り上げた、本学国文学科の豊島修教授による標記の著作が刊行された。専門の研究者だけでなく広く一般読者を対象としたものであって、最新の研究成果を踏まえつつ大局的な立場から多角的総合的に論じられている。誰しもが認める熊野信仰研究の泰斗による、恰好の入門書であり、待望の研究書でもあると言えよう。

『「一遍聖絵」』の中の一場面が口絵として掲げられたあと、目次を挟んで、「はじめに―熊野三山信仰への招待」が続く。二〇〇四年に「紀伊山地の霊場と参詣道」がユネスコの世界遺産に登録されたことに言及しつつ、「熊野信仰」の概念規定がなされたうえで、「熊野信仰が諸国に展開された理由と内容、およびその背景」にある「多くの歴史的要因」、さらには「熊野三山と熊野信仰に関わる宗教文化」、それらの説明が検討課題である、と表明されている。そして、「日本人にとって『熊野詣』とは何であったのか、また『熊野信仰』とは何であったのか、を問い直し、『熊野信仰の世界』を理解する手立てになれば望外の幸せである」と結ばれている。

右の序に導かれて、そのあとには、本論として次の七章が展開する。

第一章 熊野修験道史への展望

第一節 古代の「三熊野」と山の宗教・海の宗教 第二節 山岳海辺宗教者とは 第三節 修験道の時代

区分と修験道史研究 第四節 これまでの山岳宗教史・修験道史研究とは

第二章 熊野信仰の宗教史的・文化史的研究

第一節 熊野三山信仰の宗教史的課題 第二節 修験道の「文化史的」研究 第三節 庶民信仰としての

山岳宗教史・修験道史の課題

第三章 熊野信仰史研究の諸問題

第一節 熊野の景観と自然信仰および靈魂信仰 第二節 古代の大辺路と辺路信仰 第三節 紀伊半島の大辺路と海辺の王子 第四節 熊野川以東の大辺路と王子 第五節 諸国の行道所—三例 第六節 大辺路コースと葛城二十八宿

第四章 古代・中世の熊野三山信仰と修驗道

第一節 初期熊野修驗道の成立 第二節 熊野三山の成立と末法思想 第三節 熊野御幸の経路と様相

第五章 中世以降の熊野三山と信仰

第一節 熊野参詣者の身分・階層の変化 第二節 南北朝の乱と応仁の乱後の熊野詣 第三節 熊野三山の本願寺院と熊野本願比丘尼・山伏 第四節 那智本願寺院の那智阿弥と西国巡礼行者 第五節 ニサンドの実相

第六章 近世熊野三山の信仰と民俗伝承

第一節 近世の旅と熊野詣 第二節 氏神熊野神社と近世熊野信仰

第七章 熊野修驗道の文化史的研究

第一節 熊野三山の修驗道文化 第二節 「熊野権現御垂迹縁起」と本地垂迹説 第三節 現当二世の「立願」と熊野信仰 第四節 「本地物」の宗教性と唱導性 第五節 「熊野那智参詣曼荼羅」の絵解き 第六節 「熊野那智参詣曼荼羅」と他の熊野絵画史料との比較

各章は右の通り二、三の節から成っているが、それら各節はさらにいくつかの小節に区分されていて、それぞれに小見出しが付されている。一般読者にも読みやすくするための配慮なのであろう。他方、右の全七章をさらに大きな括りで捉えたとすれば、第一〜三章で熊野信仰あるいは熊野修驗道の歴史と文化について考究するうえで基盤とすべ

き視点や方法が提示され、それらを踏まえて、第四～第六章で熊野信仰の歴史が古代から中世そして近世へと通史的に解き明かされるとともに、最後の第七章では熊野修験道が文化史の側面から照射される、というようになるだろうか。

第一章では、平安中期以降に新宮・本宮・那智の熊野三山が組織化される以前、古代の熊野の宗教がいかなる状況にあったかを考えようとする時、海洋宗教（海の宗教・海の熊野）という視点を持つことの重要性が、特に力說されている。より具体的には、海辺沿いに古道などを遊行する山岳海辺宗教者の存在が浮き彫りにされるとともに、彼らの「辺路」修行が平安中期以降の熊野御幸・熊野詣へと繋がったことが指摘される。また、如上の海洋宗教と山岳宗教とから成る修験道は、日本の民族信仰たる庶民信仰を下部構造とし仏教や陰陽道などの外来宗教を上部構造として成立し展開したものであって、その庶民信仰の部分を充分に把握・検討することによって、支配者中心史観・中央中心史観から脱却する必要があることが示されてもいる。

第二章では、政治史的研究・社会経済史的研究・宗教史的研究・文化史的研究と四つに大別される修験道史研究のうち後二者を取り上げつつ、それら各々に関わるところの熊野信仰研究の課題が具体的に提示される。なかでも、周辺の学問分野をも巻き込んだの文化史的研究の課題については詳細に述べられており、それが最終第七章へと結びついていくことになる。

第三章では、熊野三山の自然的・歴史的景観を踏まえつつ、また、第一章で重要性の説かれた海洋宗教としての側面に光を当てながら、特には辺路信仰と王子・王子社の問題が検討される。まず四国や伊豆大島、能登半島における、海辺を巡る古代の辺路修行の具体的事例が分析されたあと、紀伊半島の辺路と王子について、伊勢神宮を經由して大辺路に入る伊勢路の問題や、熊野灘の海岸沿いあるいは海中の小島に祀られた王子・王子神の重要性とその性格、大辺路でのめぐり行道の内容など、詳細に論じられている。さらには、讃岐の我拝師山や美作後山あるいは伊吹山での

事例を挙げて、古代的なめぐり行道が他の諸地域でも展開されていたことなどが確認されている。本章に掲げられた幅広く豊富な事例は、それ自体が大変興味深いとともに、それらに基づく論考を力強く支持して意義深い。

第四章は、古代を中心にしつつ中世へと繋がる状況をも検討対象とする。まず、「奈智山」（＝妙法山）が海洋宗教の辺路修行者の集まる初期熊野修験道の本拠であることが推定されたうえで、「海の熊野」那智・新宮の海洋宗教を平安中期以降に「山の熊野」本宮が吸収し、聖地化する形で、熊野三山信仰が確立するという、盛期熊野修験道の段階に入るまでの様相が明かされる。そして、末法思想の広まりを背景に、本宮「証誠殿」が阿弥陀の極楽浄土に擬せられたことなどが示されるとともに、院政期以降の熊野御幸のコースや苦行形態、あるいは、広く熊野参詣の背景となる熊野先達や熊野御師の存在、諸施設の整備とその経済基盤、といった多岐に亘る問題へと検討が繰り広げられている。

第五章は、十三世紀以降における熊野参詣者の変化の問題から始まる。すなわち、皇族や貴族層に替わって武士層が多く参詣するようになることが確認されたうえで、藤原実重という一土豪の事例が、『作善日記』『作善願文』という史料の分析に基づいて具体的に提示されている。その次には、南北朝の乱、応仁の乱を経たあとも、参詣者が富裕な民衆層にまで拡大していくことが示されるとともに、中世の熊野信仰・熊野参詣における熊野先達の果たした役割の大きさや、熊野三山と諸地域の荘園領主や領民との社会的・宗教的な繋がりが、近江国飯道山と摂津国尼崎の事例を通して具体的に析出されている。そして、十六世紀以降になると、熊野信仰の布教・伝播者であるところの「本願」という勸進聖が、三山において組織化され、活発な宗教活動を展開することになる。本章の後半では、そのことが大きく取り上げられ、本願聖を統率した本願所寺院の組織の問題や、そこに所属する熊野本願比丘尼・熊野本願山伏の勸進活動のあり方が、具体的事例を交えつつ詳述されている。さらに、本願那智阿弥と西国巡礼三十三度行者との関係や、女性の三十三度行者「尼サンド」と熊野本願比丘尼との関連性が追究されている。

第六章ではまず、熊野三山信仰を中世人と変わることなく継続させていた近世民衆による熊野詣の実態、そのルートや「心願」のあり方、通過儀礼としての性格が、解き明かされる。そのうえで、近世の都市や村落に氏神・鎮守神として勧請された熊野神社に対する信仰のあり方について、その具体的な実相が、摂津国尼崎地域の諸事例をもとに検討されている。そして、中世民衆の熊野参詣にみる真摯な信仰実態が現実的な生活の信仰に変容している、といった興味深い指摘がなされる。

第七章で展開されるのは、政治史的研究や社会経済史的研究に比べて進展していない文化史的な研究である。熊野修験道の歴史的展開過程に生み出された「文学」「美術」「芸能」「遺蹟」「伝承」といった文化史研究上の問題のうち、本章では特に「文学」と「美術」が中心に取り上げられている。まず検討対象になっているのは、長寛二年（一一六四）以前の伝承を保持しているのではないかとされる『熊野権現御垂迹縁起』や、奥州名取の老巫女の説話伝承を画き込んだ『熊野権現影向図』であって、院政期から中世における熊野三山の神仏習合の問題、あるいは熊野信仰における現当二世の「立願」と「託宣」の問題と絡めつつ、分析が展開する。次いでは、『熊野の本地』が中心に検討され、『熊野権現御垂迹縁起』が修験系の縁起譚であるのと違って熊野比丘尼系の縁起物語であることなど、興味深い問題が説かれている。最後は『熊野那智参詣曼荼羅』について、構図と内容や絵解きのあり方、先行する『宮曼荼羅』『熊野御幸図』との関係が論じられている。

以上の七章に亘る本論部分のあとには、「おわりに」「引用・参考文献」「あとがき」が続く。そのうち「おわりに」は、こう結ばれている。

最後に現代の熊野参詣はどうかといえば、熊野三山が世界遺産に登録されて以降、どちらかといえば観光的な旅が多くみられる。そのなかでも中辺路や大辺路の古道を、少しの距離でもよいから「歴史の道」「文化の道」を

自分の足で歩く、現代風の熊野詣がさかんである。日本人の郷里からなくなった自然と歴史、および文化の側面を熊野で手に入れようと思う人びとが多いからであろう。熊野を訪れる人びとが、自己の心をより豊かにしたいと願う気持ちが横たわっているように思われる。

現代にまで及ぶ広い視野のもとで、「熊野信仰の世界」が、要所、要所的に確に押さえられながら、ありのままの姿をくつきりと明るみに引き出されたもの、それが本書である。その背後には、深い情熱と学問的な厳しさが透けて見えるようである。

なお、同じく豊島教授の著作で、やはり一般読者をも対象として平成四年に刊行されたものに、『死の国・熊野 日本人の聖地信仰』（講談社現代新書一〇三）がある。同書においても熊野信仰の世界が同じく鮮明にあぶり出されているが、一方で異なる視点なども少なからず見られる。両書を読み比べることによって、現在までの約二十年間における熊野信仰研究の進展のほども窺われるようである。

ところで、多様な分野の多数の史料類の分析・検討が、本書の一つの大きな基盤となっているが、それらの中には、国文学分野の古典作品も多く含まれている。いわゆる御伽草子作品の一つである『熊野の本地』が第七章で大きく取り上げられていることは、右に述べた通りであるが、それ以外にも、「熊野へ参らむと思へども、徒歩より参れば道遠し、すぐれて山峻し、馬にて参れば苦行ならず、空より参らむ、羽賜べ若王子」などと歌う『梁塵秘抄』は何度も引かれているし、熊野への紀行を含んだ増基法師の『いほぬし』や『日本書紀』『日本霊異記』『三宝絵』『法華験記』『今昔

物語集』『高野山往生伝』『平家物語』『玉葉和歌集』『神道集』には複数回言及されている。その他、『本朝統文粹』『新古今和歌集』『山家集』『源平盛衰記』や説経『小栗』、仮名草子『順礼物語』の名も見える。

さらに、先に示した通り、第七章において「熊野修験道の文化史的研究」が展開されていて、その中で「修験道文学」の問題が取り上げられてもいる。約二十年前の『死の国・熊野 日本人の聖地信仰』には顕著に盛り込まれていなかった側面である。山岳宗教史研究の立場から、五来重氏編『修験道の美術・芸能・文学』（山岳宗教史研究叢書第十四・十五巻、名著出版）が刊行されたのは、昭和五十五・六六年であつたが、その後、国文学研究の側においても、目立って盛んになつていくわけでは必ずしもないけれども、川崎剛志氏を中心にその方面の研究が進められている。同氏編『修験道の室町文化』（岩田書院、平23）など参照。

あるいは、右に述べた通り、第六章では西国巡礼三十三度行者のことが取り上げられているが、京都女子大学J校舎から歩いて一〇分余り、豊国神社・方廣寺・大仏殿跡の西北方、大黒町にある称名寺は、西国巡礼三十三度行者を管理した寺院の一つ、大仏組の本山である。修行者が背負つた笈（オセタ 本書一二九頁には青岸渡寺所蔵のもの）の写真が掲載されている（二基と三十三度行者関連記録三十一点が所蔵されており、京都市の有形民俗文化財に指定されている）。以上、小嶋博巳氏編著『西国巡礼三十三度行者の研究』（岩田書院、平5）など参照。

また、そもそも京都女子大学が所在するのは、今熊野という地である。新熊野神社から発した地名であるらしい。新熊野神社は、何度も熊野詣を繰り返した後白河上皇が法住寺殿に鎮守社として創建したものであり、境内には熊野から移して上皇自ら植えたという大樟もある。『申楽談義』の記述から、能楽発祥の地として知られてもいる。後白河上皇が、熊野から持ち帰った自らの前世の髑髏を埋め込んで観音を造立し、それを本尊として三十三間堂を建立した、というような説話は、『直談因縁集』などの説話集や『吉口伝』に採録されているほか、古浄瑠璃『熊野権現開帳』な

どの近世演劇において題材として活用されてもいる。

「熊野信仰の世界―その歴史と文化―」という書名だけ見ると、本書は、京都女子大学国文学科からはかなり遠い位置にあるもののように感じられてしまうかもしれない。しかし、右のような内容や周囲の状況を踏まえると、色々な意味で随分と近い存在であることが了解されてくるだろう。京都女子大学図書館本館の二階に、本書は配架されている（請求記号 I75.966T092）。

（B6版二〇三頁、平成二五年一〇月一六日慶友社刊、本体二六〇〇円）

（本学教授）